

手城学区まちづくり計画

「美しい環境づくり・心のふれあう

明るく住みよいまち手城」



2016年（平成28年）3月

手城学区まちづくり推進委員会

なんで今「まちづくり」なの？

Question



●一番良く知る者が、どうするか決める・取り組む

「地元のことは私たちが一番よく知ってますよ」

現在、少子高齢化や核家族化の進展など、社会環境等の変化により、それまで家族や地域でカバーしていた子育てや介護、防犯・防災などが新たな地域課題として取り上げられ、行政による画一的なサービスだけでは、十分に対応できなくなってきました。また、市民からも「地域の実情に応じたサービスにしてほしい」との声があがるようになってきました。

このような状況から、自分たちの地域に関わることは、まずは地域を一番良く知る自分たちで判断し、できるものは自ら行う。その上で、必要に応じて行政やその他の団体と一緒に取り組むことができるようになれば、「かゆいところに手がとどく」形で、効率よく、地元への愛着をもった「地域づくり」が行えるのではないのでしょうか。

●みんなでつながり、安心して暮らす

「知らないより、知ってたほうが暮らしやすいよね」

ゴミがあれば集めてくれる、蛇口をひねれば水が出てくるなど、社会のインフラが整備され、生活する必要最低限のサービスが提供されるようになったこともあり、「地域のつながりなんて要らない、めんどくさいだけ」、「地域の活動に必要性を感じない」と言う人もいます。

果たして本当にそうなのでしょうか。震災等で被災し、ライフラインが遮断された状況のもと、まず機能したのはご近所同士の支えあい・地域のつながりでした。さらにそのつながりが強い地域ほど、その後の復興が早かったことは周知の事実です。そのような非常時のみならず、近年多発する子どもを狙った犯罪・事故、お年寄りの孤独死など、地域・ご近所のつながり・見守り・支えあいで防げるものもたくさんあります。日常生活に置き換えてみても、隣近所の人々を全く知らないよりも、顔見知りか近所にいる方が、安心して、居心地良く暮らせるのではないのでしょうか。

みんなで行う「まちづくり」は、これからも長く暮らしていくであろう地域に、安心して、居心地良く暮らせる力を持たせることができる、そんな可能性を秘めています。

●持続可能なまちづくりを行っていくために

「このまま『ふるさと福山』に住み続けたいよね」

現在、全国的に少子高齢化や人口減少が進み、経済状況も先行きが不透明な中、福山市においても、税収は減少の一途をたどる一方、社会保障費は年々増大しています。財政状況は非常に厳しく、このまま現在と同じ市民サービスを継続して提供し続けることは困難な状況です。

今後、市民と行政とがパートナーシップを組み、「持続可能なまちづくり」をキーワードとした、自主・自立のまちづくりを確実に進めていくことが必要となっています。



出典：第二次福山市協働のまちづくり行動計画

も く じ

はじめに	1
手城学区の歴史	2
第1章 手城学区の現状と課題	
人口減少問題	3
防災について	3
人権学習について	4
無関心層について	4
自治会（町内会）未加入者（加入率）の問題	5
第2章 まちづくりの基本姿勢	6～7
第3章 まちづくり活動方針の具体的な展開	
1 安心・安全・環境	8～9
学区の課題	
主な取組	
2 保健・福祉・医療	10～12
学区の課題	
主な取組	
3 教育・文化	13～14
学区の課題	
主な取組	
4 協働のまちづくり	15～16
学区の課題	
主な取組	
手城学区まちづくり推進委員会の体制について	17
手城公民館・各町内会別の行事・サークルなどの紹介	18～21
「手城学区まちづくり計画」策定の経過	22

はじめに

福山市は、この度、市制施行100周年となる2016年度（平成28年度）に向け、今後「どのようなまちづくりをめざすのか」、「そのためにどのような取組が必要か」など、まちづくりの方向性や重点項目を定め、「第二次福山市協働のまちづくり行動計画」が策定されています。

この行動計画では、各学区のそれぞれの地域における解決すべき地域課題や将来像をまとめた「地域まちづくり計画」の策定を求めています。

そういう中で、手城学区まちづくり推進委員会では、この「福山市協働のまちづくり行動計画」に基づき、「手城学区まちづくり計画」の策定に取り組ましました。

このまちづくり計画とは、手城学区が「こうなったらいいな」や「このままではいけないな」など、そこに住む私たち自らが考えをまとめたものです。

そのため、手城学区のできるだけ多くの方々の想いをお伺いするため、2014年（平成26年）3月に手城学区住民のアンケート調査を実施し、同年10月・11月の手城学区人権学習推進協議会主催の懇談会では、アンケート結果に基づき、初めての試みとして「まちづくりワークショップ」を開催し、地域の方の貴重なご意見やアイデアなどをお寄せいただきました。

その結果をもとに、将来を見据えた課題を具体的な事項別に、住民や地域ができること、行政と協働で進めること、行政に働きかけて実施してもらうことを整理し、まとめた「手城学区まちづくり計画」を策定しました。この計画を地域の皆様が共有し、学区全体がどのように進むべきかの指針となるためのものとなっております。

まちづくりは決して一人でできるものではありません。手城学区に住んでいる住民一人ひとりが努力しなければ住みやすいまちにはなりません。

また、自治会・町内会やボランティアなど、そして行政との「協働」がなければ実現は不可能です。しかもこうした取組は持続可能なしくみを持ち続けなければなりません。地域の皆様方には、計画の趣旨を十分ご理解いただき『手城学区まちづくり』へ積極的なご参加をいただきますとともに、素敵なまちをつくるきっかけにさせていただきようお願い申し上げます。

手城学区まちづくり推進委員会
委員長 田中 恭治

手城学区の歴史

手城学区は、福山市引野町誌（昭和61年3月31日発行）によると、1666年（寛文6年）に「手城新田」として、干拓によって造成されたとされています。これは、1619年（元和5年）に入国した領主水野勝成が藩財政を拡充するために、当時、福山城下に広がっていた干潟を干拓して耕地拡大を目指した藩営事業から誕生したものです。現在の手城排水機場の裏手に見える小高い山「手城山」は、古くから、瀬戸内を往来する船の関所でした。干拓が行われる前は、瀬戸内海に浮かぶ小島でしたが、戦国時代には、毛利氏の城として重要な役割を果たし、「船手形をとる城」と呼ばれていたところから、「手城」という名が生まれました。

福山市は1916年（大正5年）市制施行され、1933年（昭和8年）10か村（川口、手城、深津、奈良津、吉津、木之庄、本庄、神島、佐波、草戸）の一つとして福山市に合併され、このことにより手城は福山市街地として大きな役割を担うことになりました。

干拓以来、米や麦を作る農家が大半で、1960年（昭和35年）頃までは、わずか約730戸しかなかった農村が1962年（昭和37年）、日本鋼管株式会社（現在のJFEスチール株式会社）の進出に伴う内海の埋め立てが始まると、職を求めてやってきた多くの人々が手城で生活を営むようになり、人口は一気に増加。今では、農業を営む家も減少し、住宅の数は増え、世帯数は約5,000戸。人口も一万人以上にまで膨れ上がり、マンモス学区となっています。



てんとうざん
天當山

第1章 手城学区の現状と課題

《人口減少問題》

急速な少子化を背景に、日本は本格的な人口減少社会に突入しております。

2014年（平成26年）5月8日の新聞報道によりますと、2040年までに、全国の自治体の約5割が将来「消滅」の危機にさらされているとあります。民間有識者らで「日本創成会議」*の人口減少問題検討分科会が公表した将来推計は、列島に衝撃をもたらしています。全国の896自治体で2010年から40年にかけて若年女性（20～39歳）が半分以下に減ると試算し、そのうち40年時点で人口1万人を切る523自治体に関しては、「消滅の可能性がより高い」と分析しています。広島県でも12の自治体が該当するとされており。一見手城学区とは無縁のことと思われそうですが、今回の発表を国・県・市が対策を考えることと行政だのみとせず、我々一人ひとりが警鐘と受け止め、日本全体で進行する「人口減少社会」に対応するため地域活性化に取り組む必要があります。

※「日本創成会議」とは

東日本大震災からの復興を新しい国づくりの契機にしたいとして、2011年5月に発足した有識者らによる政策発信組織のこと。

《防災について》

2011年（平成23年）3月、東北地方太平洋沖でマグニチュード9.0の地震が発生し、死者1万人を超える甚大な被害をもたらした東日本大震災が発生し、改めて災害の恐ろしさを認識することになりました。広島県においては、大きな被害をもたらす地震の一つとして、南海トラフを震源とする南海地震があります。過去に発生した南海地震はいずれも東南海地震と同時、または東南海地震の発生後2年以内に発生しており、概ね100～150年周期で発生しております。マグニチュード9.1・震度6強・約4分の揺れが発生した場合、沿岸部において津波の影響が生じるのが13分後、津波の最大波（3.3m）福山市への到達は4時間30分とハザードマップ*でも想定されております。アンケート結果から早急な対策の必要性をご指摘する回答が多く寄せられております。このため、地域の人々の防災意識の高揚を図り、地域の特性を踏まえた防災のまちづくりが必要です。

※ハザードマップとは

自然災害による被害の軽減や防災対策に使用する目的で、被災想定区域や避難場所・避難経路などの防災関係施設の位置などを表示した地図のこと。

《人権学習について》

1979年（昭和54年）12月13日から始まった町内会別住民学習会は、同和問題について市民の理解を深めることからスタートして37年目を迎えました。住民学習会は、これまで同和問題をはじめ、さまざまな人権問題について学習を行ってきており、「人権文化が根付いた地域社会の実現」を具体化するための身近な場として発展してきました。

しかし、2006年度（平成18年度）策定した「福山市人権施策基本方針」に基づきこれからの地域別住民学習会では、さまざまな人権問題を取りあげて考える中で、すべての人権問題に共通する課題を理解できるような内容にしていくようになりました。そこで、地域の住民学習会において、同和問題、女性、子ども、高齢者、障がい者、外国人などさまざまな人権問題を取りあげるようになりましたが、基本的人権が尊重される『協働のまちづくり』を基底にし、単に地域の生活課題に関する話し合いの場にならないようにしなければなりません。

また、若年層の住民学習会への参加を促進する必要があります。手城学区は20歳代・30歳代の参加が5.3%（2014年度実績）となっており、同和問題をはじめ、さまざまな人権問題の解決にむけた取組を風化させることなく、後世へつないでいく必要があります。

《無関心層について》

今回「まちづくりアンケート」を実施したところ、24項目のアンケートの質問に対して無回答が数多くありました。

この結果は、まちづくりに対して関心が希薄であるか、地域の活動に必要性を感じていない方々ではないかと思われそうですが、果たしてそうでしょうか。地元のことは私たちが一番よく知っているはずではないでしょうか。

良い事例があります。東日本大震災等で被災し、ライフライン*が遮断された状況のもと、まず機能したのはご近所同士の支えあい・地域のつながりでした。

さらにそのつながりが強い地域ほど、その後の復興が早かったことは周知の事実です。そのような非常時のみならず、近年多発する子どもを狙った犯罪・事故、お年寄りの孤独死など地域・ご近所のつながり・見守り・支えあいで防げるものもたくさんあります。日常生活に置き換えても、隣近所の人々を全く知らないよりも、顔見知りか近所にいる方が、安心して、居心地良く暮らせるのではないのでしょうか。みなさんで行う「まちづくり」は、これからも長く暮らしていくであろう手城学区に、安心して、居心地良く暮らせる力を持たせることができる、そんな可能性を秘めています。

※ライフラインとは

市民生活の基盤となる生命線。電気、ガス、上下水道、電話、交通、通信などの都市生活を支えるシステムの総称。

《自治会（町内会）未加入者・加入率の問題》

2013年度（平成25年度）の自治会（町内会）加入率の統計によれば、福山市全体では65.3%で手城学区では68.3%の方が加入されておられます。どちらも前年と比べて加入率は低下しています。手城学区の自治会（町内会）においてもそれぞれ工夫をされ、未加入世帯への呼びかけ活動を行っているものの、自治会（町内会）の必要性や加入するメリットなどを理解してもらえずなかなかうまくいかないという声があります。自治会（町内会）は、そこに暮らす住民同士の親睦、生活環境の維持改善、高齢者の見守りや子どもの安全対策などのさまざまな取組をしており、住みよいまちづくりを進める中で核となる存在です。東日本大震災以降、地域における防災意識がますます高まっていますが、地域力を上げるには、まず、自治会への加入者を増やすことが肝心です。加入者が増えれば、地域で抱える様々な課題なども地域全体の意見として、要求が受け入れられやすくなります。そのためにも、自治会（町内会）加入者の拡大に向けた取組を進めていく必要があります。

町内会加入率	年	全世帯数	加入世帯数	加入率
手城学区	2012年	4,962	3,420	68.9%
	2013年	5,023	3,431	68.3%
福山市全体	2012年	196,154	130,327	66.4%
	2013年	197,942	129,395	65.3%

出典：福山市情報管理課・協働のまちづくり課資料

まちづくり推進委員会



第2章 まちづくりの基本姿勢

手城学区まちづくり推進委員会では、アンケートのご意見や「まちづくりワークショップ」でお寄せいただいた貴重なご意見やアイデアなど集約し、手城学区の将来像を「美しい環境づくり・心のふれあう明るく住みよいまち手城」としました。

先人達がさまざまな事業で協働の精神を培ってきた伝統を受け継ぎ、地域住民が思いやり・やさしさ・助け合いの心を持ってまちづくりを進めてまいります。

将来像：手城学区のまちづくりのキャッチフレーズ

「美しい環境づくり・心のふれあう 明るく住みよいまち手城」

手城学区では2010年（平成22年）住民と行政がそれぞれの特性を生かしながら、連携・協力して「市民協働」による取組が必要であるという福山市の「協働のまちづくり指針」に沿って、「ばらのまち手城」を提唱し「美しい環境づくり・心のふれあう明るく住みよいまち手城」をめざし、公民館にばら花壇を整備しました。住民と行政がお互いに知恵を出し合い役割分担しながら完成しました。

これが手城学区における協働のまちづくりの原点です。このときの目標を引き継ぎまちづくりのキャッチフレーズとしました。

まちづくり活動方針

課題を解決するため、大きく四つの活動方針のもと、まちづくりを進めます。

1 だれもが安心して安全で快適に暮らせるまちづくり (安心・安全・環境)

人権文化が根付いたまちづくり、暮らしの安心・安全の確保など

2 子どもが健やかに育ち、だれもが健康でいきいきと 暮らせるまちづくり (保健・福祉・医療)

子どもが健やかに生まれ育つまちづくり、高齢者の豊かで実りある生活を支えるまちづくり、健康づくりの推進など

3 多様に学び、文化をはぐくむまちづくり (教育・文化)

生涯学習の推進、地域文化の振興など

4 ロースマインド ~思いやり・やさしさ・助け合いの心~ のまちづくり (協働のまちづくり)

協働と住民自治の推進、持続可能なまちづくり